

博士論文を書くということ

あのときの問いといまの問い

博士論文を書くということは、自らの「問い」の答えを導くための1つの集大成であり、またそれは、研究者としての道の第一歩です。

学位を得ることはゴールではなく、そこから問いを発展させながら、研究に取り組み続けていくことが重要かと思われます。

「研究の問い(=リサーチクエスション)が最も大事」といわれながらも、その「問い」を見つけたり、精錬させていくことに壁を感じるという声も聞きます。

いま、第一線で活躍している研究者の方々は、どうやってその壁を乗り越え、いまの問いに向き合っているのでしょうか。

本号ではまず特集1として、博士論文を執筆した経験を踏まえ、「問い」をどのように見いだして研究に結びつけたのか、さらにその問いがどう発展し、いまの研究に活かされているのかを、さまざまな方々に、さまざまな視点からまとめていただきました。

『看護研究』編集室